GALLERY HEPTAGON
HEPTAGON WORKS GALLERY and LIVING

Press Release
2023.2/20

小説の世界を表現する展覧会

“カタリテ”「星を見つめる人」展覧会 開催のご案内

Katarite group exhibition “Hoshi-wo-mitsumeru-hito” Direction/Novelwriting by Keiske TORIO

【展覧会詳細】
キュレーション ¦ 鳥尾佳佑
アートユニット”カタリテ”¦代表・鳥尾佳佑
池田高広／河合里奈／硅砂組 田上惠美子・田上拓／ 内藤紫帆／楢木野淑子／林葵依
白子侑季／南裕子
会期 ¦ 2023 年 4 月 15 日 (土)〜 4 月 23 日 (日)
時間 ¦ 12:00〜18:00
休廊日¦ 4 月 20 日（木）
会場 ¦ Gallery Heptagon（ギャラリー・ヘプタゴン）
〒602-8175 京都市上京区下立売智恵光院西入中村町 523
TEL：080-7583-3388 info@heptagonworks.com www.heptagonworks.com

鳥尾佳佑の執筆した小説「星を見つめる人」をテーマに、鳥尾自身がキュレーションを行い
6 組の様々なジャンルの作家によって一つの空間を作り上げます。

関連イベント「星達のまたたき」
アーティスト白子侑季による演出で「星を見つめる人」筆者の鳥尾佳佑による朗読と
ダンサー南裕子による灯りと身体表現の公演を行います。
日時 ¦ 2023 年 4 月 22 日（土）・23 日（日）18:30〜19:30
チャージ ¦¥2,000 事前予約制

Artist Statement

Press Release
2023.2/20

＊小説「星を見つめる人」について

この小説を書き始めたきっかけは、新型コロナウィルスでした。
事態の収束を祈る姿がSNSにあふれ、しかし結局世界は何も変わらない。この病は私達から願いをかける星を奪っていったのだと、そのとき思いました。
この物語は星が見えなくなってしまった世界が舞台です。
かつて星には、願いを送ったり未来を占ったりなど、人々にとって「希望」とも言える習わしがたくさんありました。しかしもう星は夜空に見えず、何を頼りにしていいかわからなくなっていく。それでも人々は、他愛もない思い出や出来事など「自分にはこれがあるから迷わずに生きていける」という揺るがない北極星のような「希望」を胸に抱えているのです。
夜空になくても人々の心にある星はまたたいています。
悲しい世界を受け入れながらも、星に思いを馳せて静かに語っていく物語です。

＊「カタリテ」について

自分の書いた小説を展覧会として表現するためアートユニットを作りました。
固定メンバーは自分一人だけで、展覧会ごとに変わっていきます。
カタリテという名前は物語の「語り部」をあらわします。
参加メンバーがそれぞれ自らの作品として、小説を語ってくれるようにそう名付けました。

＊キーワードは「世界」

この展覧会の準備をしていくとき、常に頭にあった言葉が「世界」でした。
アートユニットによるグループ展形式にしているのは、「私達の生きている世界は、一人では生きてゆけない」という思いが出発点であることによります。
両親、友達、恋人、肩を並べることも喧嘩することも慰め合うことができるのも、その相手がいるからです。自分以外の誰かがいて、はじめて「世界」は成り立つのではないでしょうか。
今回小説の「世界」を作るためにこの人と一緒に歩いていきたいなという人に声をかけていきました。
いろんな表現をする人達が一緒に集まることでその空間にうまれるものがあると思います。
小説の解釈の違いや勘違いもあるでしょう。それを正すのではなく、受け入れることを大切にしたいと考えます。

実際にこの世界では考えの食い違いが様々な場面で起こっているけれど、この思いのズレの先は争いではなく、みんなで手を取り合って生きていく世界であってほしい。
たとえこれから人と人が見えない壁によって分断されるような出来事があっても、私はいろんな壁を越えられる力を芸術に、物語の中に見出したいのです。

カタリテ　鳥尾 佳佑

小説「星を見つめる人」（抜粋）

島にある小高い丘には灯台がありました。島民達からは「ポラリスの標」として親しまれています。少年はそこで産まれました。月明かりもない暗い夜でした。少年の産声は夜明け前の澄んだ空気を含んで島の歌声のように島に響き渡りました。その産声を聞いた島民達は導かれるようにポラリスの標に集まりました。少年と母親は水平線の向こうで顔を出し始めた朝日に照らされて横たわっていました。赤い血と白い肌に混ざり合う二人の姿は漆を塗った器のようにしっとりとした輝きを放っていました。まだ二人は一人だった頃の存在のように。島の助産師が到着し二人が繋がっている緒を切り取り、産院へ運びました。狐の嫁入りのように列をなし、揺れないように、落ちないように、この世で最も大切な宝物を運んでいるのだという心持ちで島民達は真剣そのものでした。その間も少年は産声で島を包んでいました。その歌声はどこか悲しみと切なさで帯びていました。産院に着く少し前、晴れているのに雨が降り出しそしてすぐに止みました。日の光に反射した雨はスパンコールのようにキラキラと輝きました。

少年は産湯に浸かり、柔らかい羽のようなタオルに包まれて、ゆりかごで眠りにつきました。母親も出産した際に付いてしまった汚れを綺麗に落としてもらい、白い衣服に身を包み、美しい口紅を一塗り、髪も櫛で整えてもらいました。助産師は母親の顔がこんなにも美しいのかと溜め息を漏らし、もう開くことのない目蓋に落ち着いたオレンジ色のアイシャドウを添えて、この人が恋をして、愛を育んで少年を身籠った日々を思い返していました。

母親は島の漁師と恋をしました。恋の悩みや将来のこと。島民達は二人のその姿をいつも微笑ましく眺めていました。漁師達は船にモールス信号を発信できる回光通信機を付けていました。光の点滅で言葉を作る。

ニシニ　イコウ
ココニハ　イナイ
ナミガ　オオキイ

星を見つめる人.indd 14-15 2022/09/21 21:49

ヒキカエソウ

時には、指示を、方角を、危険を、日常会話を…彼らの操る光はかつて人類が空を見上げて見ていた星の瞬きのようでした。漁が終わり帰路に立つ頃、一人の漁師は灯台の光を探していました。無事に島へ帰るためにはポラリスの標の光が必要だからです。オレンジ色の温かな光は決して大きい光ではなく慎ましくゆっくりと恥ずかしがり屋な子供のようにきらめいていました。その光を見つけたとき、無事に帰れるという安堵と愛しい人の笑顔が巡ります。そしていつも回光通信機である言葉を送っていました。きっと誰にも届かないその言葉はたった一人のために送っていました。それは宇宙に漂う北極星のように誰とも会わず、広大な空でぽつりと独り言をしているようでした。その光をポラリスの標から見ていた母親も漁師と同じように無事に生きて帰ってきてくれる安堵と愛しいあの人の笑顔が蘇ります。この広い空を孤独に佇む北極星の声を一言も逃さないように、大丈夫、あなたの声は私には届いています、と灯台の光に想いを託していました。

漁師が旅に出る前の夜。

キャンドルをともした寝室で二人は語らい、キャンドルの灯火は小さく揺れて、それは微笑んでいるようでした。

「あなたがいれば私は迷わずにいられる。そう信じていたの。たとえあなたがいない日々でも心に汽笛が鳴っている。船に乗って潮風に吹かれながら遠ざかっていく横顔を霧で霞んで見えなくなるまで港で立ちすくんでいたわ。あなたが好きと言った灯台の光。ポラリスの標は漁師にとって命綱と同じくらい大切な光だと言っていた。だから帰ってくるその日まで灯台から海を眺めていたのよ。あなたはきっと灯台の光を探している。その光を見つけたとき、船からは回光通信機で僕らはここにいるよと知らせてくれる。その瞬きはきっと星の動きと同じなのかしら…。だとしたら、私にとってその光は

星を見つめる人.indd 16-17 2022/09/21 21:49

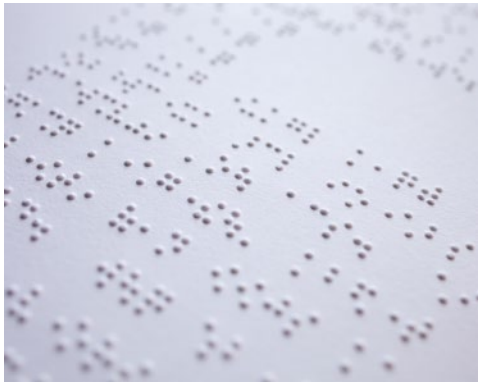
●カタリテ・鳥尾佳佑

Press Release
2023.2/20

2012.3　成安造形大学 造形学部 写真クラス 卒業
2021.7　紙にまつわる仕事に携わる「とりのおっぽ制作室」を開業。
2023.1　小説を様々な方法で語るアートユニット「カタリテ」を発足。

大学時代から写真を学び、人にとって光の存在について考えています。
写真を中心として、点字や小説など言葉を用いた制作、またグループ展の企画も行っています。

主な個展
2019.8-11　「穏やかな日向をあなたへ」東京、愛知、京都の巡回写真展
　8.23-8.27「第一部 こころの寄る辺」 art lab Melt Meri
　9.18-10.6「第二部 家族のうつわ」 GALLERY MARQUISE
　11.1-11.17「第三部 希望のかけら」ART FORUM JARFO
2020.4.1～　「第四部 穏やかな日向」冊子にて発表。
2020.5　「悲しみのほとり、星のない夜に願いを」JARFO ART SQUARE
2020.9　「青の欠片」GALLERY wks.
2021.3　「ヒカリノシマ」GALLERY wks.
2021.4　「ヒカリノシマ / 光の輪郭」art lab Melt Meri
2022.9　「Twilight Etude」art lab Melt Meri



私は写真家として活動をしていました。
「いろんな人に作品を見てもらいたい。」
この気持ちは作品を作り始めたときの純粋な思いでした。
目が不自由な人達にとっては写真で作品を作り続ける限り、
伝えることが難しいということに気がつき、模索していく中で、
自分の作りたいイメージを小説にしました。
写真も物語も読者の記憶に語りかけていきます。
作者の思い描いている記憶と読者に眠っている記憶は同じになるとは限りません。
それぞれが物語の言葉から生まれる「想像の絵」に目が見える、見えないということは何の関係もないと思います。
記憶から呼び起こされる想像の絵。
私はこれもまた写真と言えるのではないか、そう考えています。

●カタリテ・池田高広

1983 年 滋賀県生まれ
大阪芸術大学美術学科版画コース卒業

生活や食、山や生きることを作品のテーマとして版画、絵画を主に制作しています。
近頃は山を登り感じたことや考えていたことを山をモチーフに絵を描いています。

山へ登り夜空を眺めて綺麗だなと感じた星や月は、今だけではなくきっと昔の人や遠く離れていて
この瞬間自分の目の前にいない人とも同じものが見れて嬉しいと感じる。
見えなくても感じることが出来る。そんな絵を描きたいと思います。

●カタリテ・河合里奈

Press Release
2023.2/20

失われた時間をどう生きようか
冷えた身体が　此処に在る
眼の前にあるモノ 影の如き
影のまた影にすぎない
海　鉛色の水面
ポッカリと空いた大きな穴
天を見上げて月の存在に気付く
内から外　外から中心へ
丸が丸を呼び　丸を増やし　丸を生成する
そこに一路領域　突如出現
此れは何だ　悪夢を見る　荒れ狂う
精神と肉体の垣間見る先に
何が起こるのだろうか

1995 年　愛知県生まれ
2018　名古屋芸術大学 美術学部 美術学科 卒業

2014　ペンランド オブ クラフトスクール 短期個人留学 (作品展示) ノースカロライナ、アメリカ
2018　名古屋芸術大学卒業制作展 (ガラパゴス賞)
「AICAD 2018」ナショナルアートギャラリー、マレーシア (作品展示)
2019　「情の深みと浅さ」ヤマザキマザック美術館 あいちトリエンナーレ連帯企画事業 、名古屋
「Antibodies collective」黄金 4422bld. 名古屋 (パフォーマンス、作品展示)
2020　「Collect」ギャルリ hu: (グループ展)
「意識ノ断片」Galerie hu: 名古屋 (個展)
2021　「存在のシンソウ」Galerie hu: 名古屋 (個展)
2022　「確かに存在する今、を咀嚼する」Galerie hu: 名古屋 (個展)

鳥尾さんの作品は文章から柔らかさと繊細さを感じました。
双子の作品では石をテーマに描こうと思います。よろしくお願いいたします。

●カタリテ・硅砂組

Press Release
2023.2/20

田上惠美子と田上拓によるアートユニット。全国各地の山や川、海で採集した石に、ガラスや金属箔などを組み合わせ、
オブジェやアクセサリーによる複合表現を模索しています。
研磨、バーナーワーク、キルン、サンドブラスト、金銀銅箔の熔着といった技法を、
各メンバーが分業 / 統合して制作しています。

田上惠美子：
立命館大学文学部心理学専攻卒業
1990 年頃よりガラス制作開始。
伊丹国際クラフト展
日本現代ガラス展
日本クラフト展
現代ガラス大賞展富山
日本伝統工芸近畿展など入選入賞。
バーナーワーク・キルンワーク・
サンドブラストにより作品を制作。

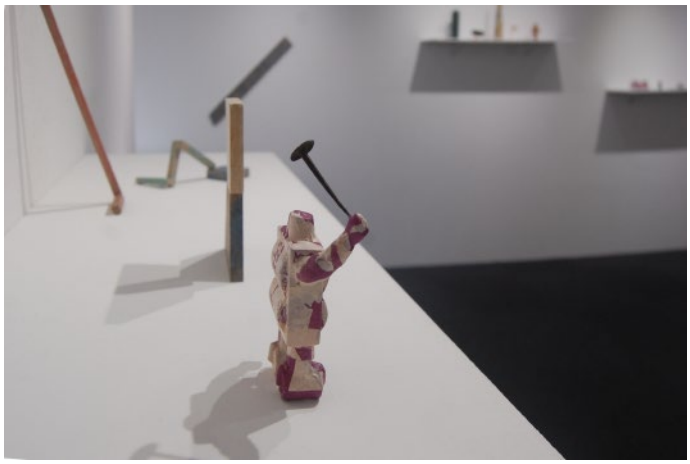
田上拓：
京都工芸繊維大学機械システム工学課程卒業
京都現代写真作家展入選
美術工芸品の写真撮影、レンズの改造を手掛ける。
研磨・キルンワーク・バーナーワークによる
ガラスや石の作品を制作。

2019 国際ガラス展金沢 金賞 / 2022 伊丹国際クラフト展 入選

物語のイメージが少し広がるような作品を制作できればと思います。

●カタリテ・内藤紫帆

Press Release
2023.2/20



1993 年　京都生まれ
2016 年　京都精華大学テキスタイルコース卒業
古紙や古道具を使った小さな立体制作や、染色技法であるろうけつ染めをベースに用いた作品などを制作している。

（近年の主な展示）
2022　内藤紫帆展　SHIHO Naito solo Exhibition（JINEN GALLERY　東京）
　　nuance (Gallery SOQSO)
2021　内藤紫帆展　SHIHO Naito solo Exhibition（JINEN GALLERY　東京）
　　SHIHO Naito solo Exhibition「ある」（京都精華大学 kara-S　京都）
　　物と視点 企画展「作家の視点 Vol.1 内藤紫帆」(kumagusuku　京都)
2020　内藤紫帆展　SHIHO Naito solo Exhibition（JINEN GALLERY　東京）

小説の世界をイメージした展示というのは初めての経験です。貴重な機会を頂き、ありがとうございます。

昨年の夏、私は自転車で旅をしていました。北海道から鹿児島まで、日本海側を走る旅でした。約 3000km 走り、目指したゴールは本土最南端の岬でした。その岬には白い灯台があり、夜になると星に紛れて優しく光を放っていました。

鳥尾さんの小説の中には灯台が出てきますが、自分がゴールで目にしたあの光景のことを思い出しながら読み進めています。文字から記憶をくすぐり出すと、波の音や温度、香りまでも蘇るようです。

小説の世界と旅の記憶とが合わさり、どのような空間になるのか、とても楽しみにしています。

●カタリテ・楢木野淑子

Press Release
2023.2/20

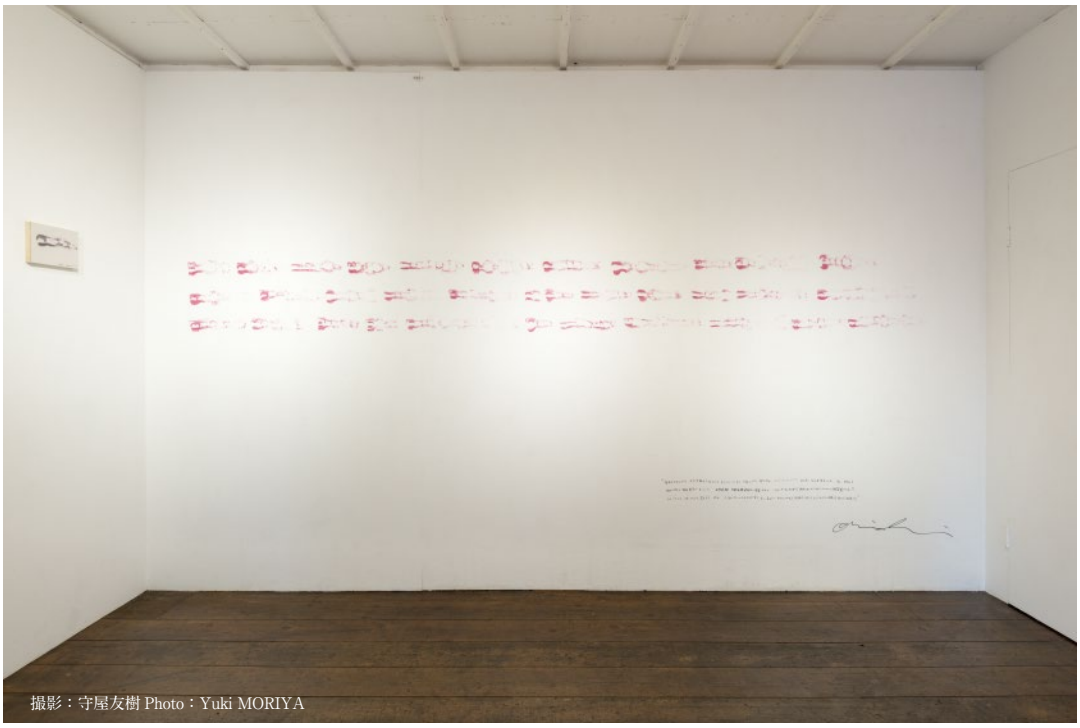
1985 年　大阪出身
2010 年　京都精華大学大学院芸術研究科博士前期課程修了（陶芸）
2012・2018 AIR Guldagergaard デンマーク
2022・2023 AIR 滋賀県立 陶芸の森
2015　　岡本太郎現代芸術賞展入選
2017　　六甲ミーツ・アート 2017 芸術散歩 奨励賞 他
個展グループ展多数

陶を素材として制作を行っています。
私の作品の一貫したテーマは「華やかさや豊かさ、生命力が溢れ出る歓びを表現する」です。
手芸用レースやアンティークブローチ、ピアス等のアクセサリーの装飾的な表面を型取りした細やかなパーツを用いながら、様々な生き物、事象、文様等を引用し身の丈を超える大きさの立体や、手のひらに収まるような小さな世界を作り上げます。

ここ数年、自身の制作や生活において「目の前のことに集中する」ということを無意識にしていたように思います。
確かな現在を着実に誠実に歩むことで、先の見通しに感じる朧げな動揺と心もとない揺らぎから距離をとるために。
　星を見る行為は、私にとって先を見るということに似ています。敢えてしないようにしてきたことを、この展覧会にお誘いいただいたことで思い出しました。
　小説を読むと登場人物は皆過去を語ります。ここでの星を見つめる人は、大切に過去を抱き丁寧に現在を生き、まっすぐ未来を見つめているようです。私もそうなりたい。。。
　静謐な優しさで溢れる小説世界の表現を作品で試みる今回の展覧会を楽しみにしています。

●カタリテ・林 葵依 /Hayashi Aoi

Press Release
2023.2/20


撮影：守屋友樹 Photo：Yuki MORIYA

撮影：守屋友樹 Photo：Yuki MORIYA

1988 年　京都府生まれ
2013 年　京都造形芸術大学修士課程修了

音声をはじめとする身体のふるまいに独自の形を与え提示している。
主な個展に
2022　「息骨に触れる」KUNST ARZT(京都)
2020　「息差しの型取り」+2(大阪)、「遊動躰」Gallery PARC(京都) など。

2020 年度第 4 期常設展「画家の痕跡」高松市美術館 (香川)
2018　「VOCA 展」上野の森美術館 (東京) に参加。

2022　第 1 回白髪一雄現代美術賞
2015　第 63 回芦屋市展吉原賞を受賞。

この小説では、人々の何気ない日常のやりとりや、さりげなくもどこか優しい心の機微が丁寧に描写されていますが、話中から聞こえくる音や話し声に注目してみると、また違った風景が見えてくるかもしれません。